

一九三八年を振り返ってみて

福島県 海老名 光 夫

思えば小学六年生になった五月ごろ、父から「満州に行くぞ。光夫も満州から軍人となり、日本のために頑張ることができろ」と言われ、嬉しかった。当時の「満州」の言葉はなんとと言っても別天地、分かったような分からないような言葉であったけれど、当時では大衆心理をよく把握していた。酒を飲んでよい気持ちになる、そのような言葉であった。

日本の典型的な山村地域に生まれ、集落の中には封建的な習慣が充満されていた。子供心にも島国根性の集落を出て、満州の新天地で思いつき生きよう、そして立派な兵隊になり、東洋平和のためにこの一命を国に捧げることができると、希望を抱いて新潟港より「天草丸」に乗船したのは、昭和十三年のことでした。初めて見る海、大きな船体、この船で満州へ。子供

心に優越感らしきものが芽生え始めていた。父は悲しさを忘れるためか酒を持ち込み、隣の人と正に意気投合の様相。無理もなからう。建久二年の祖先を持つ身で、全財産を捨て新天地に一家を連れての希望多い船出であるとともに、それに倍して苦しい胸の内が、今になって理解できる。

朝鮮の清津港に上陸、昼食を町で済ましたが、その雰囲気は、あの遠い海を越えてきても日本と変わりない。なにか安堵感を覚えた。

その日のうちに、佳木斯行きの列車に乗り込む。そのとき「海老名さん」と大きな声で呼ばれた。振り返ると船中で友達になった方で、清津でお別れなので、子供さんにと鮎玉を、父には酒をいただいた。父とお互いに頑張りましょうというようなものだった。今でも鮎玉を口にすると、あのとかが印象に残っていて、思い出す。

日本の列車は二人掛けだが、満州の列車は広軌で、三人掛けなので、祖父母・弟・妹・母とで同席、父は隣の席にという、全く家族的旅行だった。山の中から

出てきた私は、見るもの聞くものすべてに興味が深かった。父が「豆満江とまんかうを渡った。いよいよ満州だぞ」と眠りこけていた家族に声をかけてくれた。まもなく列車が止まり、客が入ってきた。始めて見る満州人の姿に、母校で見た日清戦争講話条約のときに出てくる、李鴻章を思い出した。次第に車内に、何にも例えようなない悪臭がしてきた。

いつのまにか眠り、白々と明ける大陸のひんやりとする朝を迎えた。窓を押し上げて開け、満州一番の外の空気を胸いっぱい吸い込む。そのとき日本の兵隊さんが完全武装し、銃を抱え、前方面を警戒しているのを目の前で初めて見た。関東軍のりりしい姿「ここはお国の何百里」と歌われた軍歌の、夜明けの立哨写真を思い出した。そのとき、日本刀を腰に下げた将校が来た。また即座に兵隊が機械のように、軍靴の踵を「カチリ」と合わせ「捧げ銃」をし、それは美しく荘厳極まりない軍律行動であった。

私が兵隊になったらできるだろうか、戸惑いの思いが忘れられない。アジア永遠の平和と居留民保護の

ために、至る所に皇軍が駐屯していた。今十三歳、これから八年で徴兵検査は長い。志願して一日も早く兵になりたい。そうすることが、父の望む満州開拓を守ることができると、ひそかに心に誓った。

小拓士を乗せた列車は日中は各駅で止まり、兵隊さんの姿を見ながら、予定通り弥栄の駅に到着した。祖母の姪夫婦が迎えにきてくれた。祖母が一番嬉しかったようだ。

いよいよ翌日から新しい学校に通う。

父は弥栄訓練所で、何日かの現地教育を受け終わると、孟家崗の町中の訓練所と警察署の近くにある、土で造った中国家屋に引っ越した。隣の満州人の李さん一家は、父と大差がない年回りの夫婦と老父母、子供二人、全く似通った家族構成だった。一番嬉しそうなのは祖父で、言葉が分からないので手真似の交友となり、中国料理の夕食を時々御馳走になったようだ。母は、白米の飯を持たせてやったので、何日もたないうちに、兄弟以上の仲になった。学校から帰ると、

「ギョーザ」などをよくいただいたことが思い出され

る。父は家族を安定させると、八虎力^{ばちこりき}方面入植現地に
出発、李さん一家とは二年近く、民族を越えた付き合
いが続いた。

永住地の建設も完成し、弥栄駅より八虎力駅まで列
車で、駅より歩いて三十分ぐらいの所に引越し、祖
父は李さんが手配してくれた馬車で荷物とともに、正
に新天地への到着となった。父は、李さんに大変お世
話になったことを知り、時々顔を出していたようだ。

昭和十六年に祖父が死亡。葬式も終わり、家中そろっ
て食事をしていたら、孟家崗の李さんがみえた。中国
製の太い線香とギョーザを持って、祖父のお悔みにき
てくれたのだ。満語もできるようになったが、日本語
調の満語ではなかなか通用しにくい。御老人と対話の
ときは、やはり手真似がないとできない。李さんは一
緒に生活したころの思い出話を、手真似足真似で涙を
流して繰り返してくれた。父母も祖母も満州最初の先
祖が、現地の人から慕われた喜びで、涙となってか、
李さんと手を握り合っていた。

父は、李さんに白米を返礼に差し出したら、受け取

らない。何とかお願いして受け取っていたのだ。そ
のときの李さんと父の姿が、晩の裏に焼き付いている。
言葉が分からないということは、習慣に逆らうことも
ままあることゆえ、一日も早く満語を話せるようにし
ないと仲良くできないと思った。二人の姿を見たとき、
学校で習った日満親善とは、こういうところから始ま
るものかと気付くようになった。

昭和十四・五年ころと思うが、孟家崗在任に、駅の
近くで遊んでいると、列車から降りた中国青年が近寄
り片言の日本語で「国民優級学校（現地人の小学校）
はどこですか」と実に丁寧^{ていねい}に聞かれた。満州にきてこ
んなに丁寧な言葉と態度で、中国人から接しられたこ
とはない。半分偉くなったような、また、半分丁寧な
相手にどう接したらよいか、とまどった。聞かれるま
まに答えながら、一緒に歩き学校の前まで案内した。
相手は「ありがとう」と繰り返す。私は「さようなら」
と言って別れたが、良いことをしたような、もっと相
手と話をしたかったような、心残りが続いた。

一カ月近く過ぎて、学校で満語の時間割ができた。

四方幸三校長と一緒に教室に入ってきた満語の先生、なんとあの時の人であった。目と目が合い無言の交感。「紳士という言葉は知っていても、紳士とはどのような人だろうか」とあのころ考えたことがあった。初めて紳士に会った気持ちだった。名前は「劉」先生、時間の終わるころ、私のところにきて「この前はありがとう。町におります。遊びにきてください」と言葉を残して、教壇に立たれた。

時折時間を見て、先生の家に遊びに行ったものだった。先生は、日満のことを、また日本がなすべきこと、満州人の生活が遅れていたことなど、よく話してくれた。四方校長も知らないままに、劉先生との付き合いは卒業まで続いた。私は良い先生と巡り会うことができた。

卒業して団本部に勤めたが嫌になり、佳木斯の軍の酒保に出入りしていた、父の友人を頼って、勤め先に無断で佳木斯に飛んだ。次の日から、西南崗に駐屯している歩兵師団の軍酒保の手伝いが始まる。一カ月、兵隊さんと暮らす。隊長が入ってくると「敬礼」と大

きな声。皆注目。兵隊とはよいものだ、実にきれいだと思つた。初めて接する兵営の生活に興味を持ち、自分から進んで仕事を見つけ働いていたら、家から父が迎えにきた。開拓団長が「長男を連れてこい」とのこと。どうしても団本部が嫌なら、種畜場で農業と畜産の勉強をするようにとのこと。短い軍酒保と別れ、種畜場へと行くことになった。

弥栄種畜場は、若い者には憧れの場であった。酪農を主体とした農業経営の実践道場であり、孟家崗から南西の方にキング式の大きな建物が丘の上にくっきりと浮かび、弥栄開拓団の象徴的な存在になっていた。初めて見る大型機械、開墾に必要なプラオアスク砕土機、モーター・パ刈取機、ポテトプランター・コーンプランターから二四条条播機、正に経営面の実情は、近代的といひうる設備であり、畜産は乳牛五十頭、馬三十頭ぐらい、養鶏、養蜂、牛乳加工設備、肉加工部門はハム、ベーコン、ソーセージに至るまで、開拓業務に対して充実していた。

拓務省囑託の堀北進場長自ら、満州開拓農業農民を

成功させるには「どうすべきか」、夫婦二人で十町歩近い耕地を運営するには、まず資金であり、その資金獲得に多角的農業経営を充実させ、酪農を主体とした有畜農業経営を樹立、家畜の品種改良にも努力された。春、まだ地下一メートルも解凍しないうちに、野菜の温床造りなど自ら現場に手を出し、各方面より参集していた研修生の、講義と実習に情熱を燃やされた。今でも先生に指導いただいた、農業に対する知識が一番役立っている。

何事も十年。開拓もようやく軌道に乗ろうとしていた、十八年秋ごろより戦争が激しくなり、場員は私を含めて三人ぐらいになっていた。

種畜場に来てからも、劉先生との交友が続いた。彼は、ある日ポツリと言った。「日本は満州を固めて、外にあまり手を出さない方がよい」と。私は何のことか、当時は理解できなかった。兵隊になって、やっと先生の一言が理解できた。

東満国境に位置する方面の兵舎は、もぬけの空だった。ソ満国境守備隊を本土決戦に備え、既存兵力の多

数と装備を転用した。兵舎には徴兵検査後入隊してきた新兵と、召集老兵の集団がおり、関東軍の精鋭はいずこに…。

この東満国境地帯には、多くの開拓団が入植して、食糧生産はもちろん第二のふる里建設に家族ともども、国策遂行の努力をしている今、花開き実を持たせなければならぬときに…いやいや我が国は神国だ。日本は絶対に負けることはない、心に刻み精励したものだ。

昭和十九年も種畜場で迎えた研修生は私一人。戦局が思わしくなく、この満州開拓団はどうなるのだろうか、新聞などでは戦局の不利が見えるころになった。兵隊に征かなければ、日本は負けてしまう。そのような気持ちになっていた。

長野の永井吉久君と、予科練をハルビンで受けた。彼は耳、私は眼で二人とも不合格。次に現役志願して甲種合格。野戦重砲兵、佳木斯で検査を受けた。尻を「ペタン」と叩かれて合格。検査官の前に進み、「甲種合格」という言葉をちょうだいしたとき、日本人とし

て生まれ育った嬉しさと、母への感謝に頭が下がった。入隊の日が決まり、学校、そして堀北先生宅へといさつ回り、思い出話など御家族と話し合った。先生は戦争が終われば、もっと大きな種畜場を造り、満州開拓の総合伝習所を作る考えの話があり、「海老名、きつと生きて帰るんだぞ」と日本酒を御馳走になり、帰路開拓団長宅へ回る。団長は「頑張ってくれ」と一言。あと何も言わなかったのは、日本の形勢を知っていたのではなからうか。父は喜んだ。「満州から入隊できてよかった。一人前の兵隊になってこいよ。銃後は心配ない。父も母もまだ若い。力いっぱい頑張れよ」と言う。今でも父の残した言葉が忘れられない。今考えると、満州で育まれた人間教育の芽は、なんとすばらしい遺産ではないだろうか。入隊出発日に一番好物の大福餅を、母は作ってくれた。夜行列車に乗り込み、見送りは父一人、戦局悪化のため、隠密入隊の指令だった。

赤栄警察署の兵事係、小沼氏が、同じ列車に乗り込んでいた。「よう元気できてくれたな!!」彼は私が学

生のころからの警官だ。列車の中で思い出話をしているうちに林口へ。そして虎林へと走る。「うまい、うまい」と小沼氏と大福餅をほおばった。列車には憲兵がいて、「話をするな」と注意される。大きな希望を持って志願したのに、気がめいるような感じだ。兵隊の移動とはこんなものかと。出征兵を何回となく送ったことがあるが、私の場合「こそどろ」のような指令行動、それでも負けるとは、思わなかった。

いよいよ虎林に到着。小沼氏とは列車内で別れる。改札口に向かうと下士官に「ごみを集めるよう」「三一〇七」と部隊名だけを言われ、隊者は集合して、トラックに乗せられる。どこをどう走っているのか分からず、二十分ぐらいして止まった。全員降車の命令。テキパキと人員を数えられ、半地下の兵舎に入った。宮庭には砲らしいものが、いっぱい並んでいる。正に国境らしく、体が引き締まった。朝起きて見たら、練習用の木製迫撃砲であった。一期の検閲が終わり、中隊長当番に回された。

ある夜中隊長室前で、「海老名、帰ります」と言う

と、「ちょっと待て、中に入れ」と言う。恐る恐る入り、直立不動。「堅くならんで聞け」足がガタガタ震えた。「海老名の父から手紙がきた。何をやっているのか」「ハイ、弥栄開拓団であります」その手紙の内容は「豚児を立派な兵隊してくれ」ということであった。それで「下士官志願をしないか」と聞かれる。

「ハイ、海老名は下士官志願をしております」「よしわかった。帰れ」「帰ります」当時、上官との対話はこのままであった。新潟県生まれの本間中隊長には、かわいがられた。下士官教育、ムーロン（穆稜）の戦闘陣地撤退そして大海林の強行突破、九月十九日の敦化での捕虜、敦化から牡丹江第五軍兵舎まで一緒だった。迫撃第十三大隊一中隊は、たったの十二人しか残らなかった。

昭和二十年八月八日のソ連軍侵入、九日にはムーロンまでソ連軍の砲列が到着していた。榴弾砲の音が「ガラガラ」と天地を揺るがす。生まれて初めて聞く音に、いよいよ戦機到来とはかり、負けることも知らず同年兵と血を沸かしたものだ。これも大和民族の進

攻教育のしからしめるところか。ムーロン陣地で十四日まで、ソ連軍の砲火が続く。

機関銃中隊速射砲大隊には最初のころは、迫撃砲隊にも大変お世話になったが、陣地丸出しの砲列ではソ連軍の敵ではなかった。しかし戦闘技術においては、日本軍の一方的勝利を相剋する場面もあった。ただ武器がなく砲弾の補給がつかず、全くまいった。当時の関東軍上層部は放棄作戦を決断しながら、隷属部隊には「玉砕するまで死守せよ」と指令していたようだ。

私がシベリアから脱走して会った父（当時四十八歳）の話では、ソ連軍侵攻の翌日、開拓団の男子の「根こそぎ動員」が行われ、牡丹江の指定された部隊へと到着したが、その部隊は見つからなかったそうだ。その時間帯のうちにも、ソ連軍侵攻の速度は早く、凶佳線が不通となり、ハルビン経由で第二の故郷へ帰ろうと単独で綏化まできたら、ソ連軍が進入、列車から降ろされた。そこで、弥栄から非難してきた家族と出会った。そのとき、既に私の弟妹は死亡していたそうだ。父と別行動をとった人たちは、シベリアに送られ、十

年余、重労働役強制下のなかで多大の犠牲者を出した。

昭和二十年ころからの関東軍は組織する力もなく、ソ連軍の前に無力化した姿で、ただ神国の精神力のみで立ちほだかり、そこに居留民の大犠牲が続出、関東軍のみならず、日本国の棄民体質をつくることになった。迫撃砲の攻撃は続行された。谷間に砲列を組み、どこに布陣しているのか不明、指揮班の連絡で正確無比といっても過言ではない。ソ連軍先頭部隊を攻撃した。十五日の午後より空中からの攻撃が開始された。地肌を余すところなく、爆弾のお見舞には、全くまいった。夜陰に乗じて東京城方面に部隊の移動を開始する命令伝達、「各小隊は砲を破壊し、中隊指揮班に集合」私は一小隊に、真っ暗な道なき道を選び伝達した。各兵隊がそれなりに集まり、そこから第五軍司令部まで移動。師団との連絡は全くつかなかったようだ。第三小隊佐々木見習士官の陣地は全滅、そのとき伝令がやつと間に合った。

山中を行軍すること一カ月、至る所に日本軍の兵士の腐乱死体、「俺も、今日か、明日か」と思いながら

歩き続けた。そのころ緩化に非難した開拓民たちのなかで、子供たちが栄養失調と疲労のため、バタバタと死出の旅路に立ち、その上ソ連兵による婦女子への暴行が激しくなっていたことを知る由もなかった。

陣地を出てから何日になるか、川を渡り、大陸の太陽に焼かれて靴も破けそうだ。しばらく行軍すると、土手に腰かけ、背のうにもたれ銃をしっかりと抱いて、目ばかりギョロギョロして口もきけない兵隊に会う。身に着けている服装は、二種軍装のようだ。若い志願兵と立場が同じせいかわ、深く印象に残る。空腹のため餓死寸前だ。どうすることもできず、ただ「頑張れよ」と一言。

隊列から離れば死だ。太陽も西に傾くころ、満州特有の密林から草原に出ようとしたところで、四、五十人の集団が、防毒マスクを着装する寸前の姿勢で死亡していた。ソ連軍のガス攻撃に遭った部隊だ。我が隊は草原に出ないで、また密林内の行動となる。

思えば、現在平和な時に、思い出を書いているが、筆舌に表すことのできない、記しても理解していただ

くことのできない、極限の世界を通過してきた。

夕方、満州によくある小さな廟の前を通る。現地民家が近くにあるなど感じる。小休止の伝達、一人の中国人が出てくる。本部の方では道でも聞いているらしい。間もなく出発、丘を登るようだ。稜線行軍だ。暗くなって大休止の命令が出ない。「おい、今夜は寝ないで歩くのか」ぶつぶつ言いながら歩く。そのとき、横の丘より曳光弾が上がる。真っ昼間と同じだ。集中砲火の攻撃だ。「伏せろ、伏せろ」中隊長自身で三十余人の迫撃兵に「隊から離れるな、先頭に続いて行軍せよ」と背をたたいてくれた。ムーロン陣地布陣は歩兵二大隊に編入された迫撃一中隊であり、陣地撤退のときは七百人ぐらいたったが、夜襲ごとに少なくなり、今度は自分の番ではあるまいかと何度か脳裏に走る。だが不思議にどこかで「生き抜くぞ」と反射的に走るものがあつた。

しかし、当時二十七歳の中隊長が、あの土壇場で一兵を思う行動力、無事に国に送り帰そうとするあの気持、正に指揮官はかくあるべきの姿勢が読み取れた。

眠気はどこかへいってしまった。ただ先頭に付いて逃げるだけだった。戦友と「あの満人が、ソ連軍に連絡したのだろう」「殺してしまえばよかったのにな」などと話し合った。何時間逃げたのか、銃声はやみ原生林の中で止まる。止まるとぐったりだ。だれがいるのか、いないのか、自分は生きていたという感じだけだ。中隊長が回ってきた。今夜はここで夜宮。迫撃兵が十二人いないということであった。中隊長が列を離れると、その後は、道端で出会った兵隊のように、意識不明のまま寝てしまった。

朝になり出発の命令もなく、太陽が木の間からさんさんと輝きを見せてくれる。食もなくてただ眠るだけだ。あれもいない、これもいないと部隊が少なくなれば、次は自分の番に迫ってくると、生き延びた戦友と心寂しく話し合う。出発だ。ただ先の者が歩くから自分も歩くというようなものだった。畑に出る、何かあるかと展望、玉蜀黍とうもろこしのようだ、大豆もある。迫撃兵だけ集まる。桑山少尉は元氣のようだ。

「海老名、玉蜀黍を生で食べたことがあるか」と言

う。食ったことはなかったが「ハイ、ウマイデアリマス」と言ってしまった。「ようし、あの畑の物を今夜いただくことにしよう」話は早い。「待て、中隊長と話して来る。俺が帰るまで動くなよ」まもなく今夜はこの地で宿営と決まる。必ずこの地に帰るように、迫撃兵はまとまって行動するように言われ、薄暗くなつた畑に入る。ガサガサと取る。皮をむいて先の方から「ガブリガブリ」甘い、なんともいえないうまさだ。思い思いに持てるだけ持って宿営地に帰る。中隊長以下兵隊におみやげ、「うまいうまい」の連発だ。火は絶対にだめだ。生玉蜀黍を食って腹の虫がおさまる。また眠ることにした。

「オーイ、ここに生まれ」なんの話だろうと思ひ、皆円陣を作る。本部ではいろいろと心配して情報を集めているが、「皆に心配と苦勞をかけて申し訳ない。しかし生きて日本に帰ることだ。今夜か明日中には間島省老松嶺付近の鉄道を横断する。全線にソ連軍が侵入。日本軍があちこちで投降しているらしい。我が部隊は、死を決して日本本土に上陸するまで頑張る。隊

を離れず行動するように」その時点で日本の前面降伏については、知っていて否定していたのか、否かを知る由もなかった。

隊長の訓示が終わり、桑山少尉が整列の号令、「抜刀」全員起立、「キオツケー」「中隊長殿に敬礼、カシラー中」陣地脱走以来、久しぶりの軍隊らしい行動、嬉しさがよみがえる。昨夕の玉蜀黍が精気の原動力か。しかし振り返ってみれば、関東軍最後の「カシラ中」であった。出発だ。黙々と行軍が始まる。また畑に出る。この辺りは開拓団が多いはず。また食べ物をちようだにする。居留民保護の軍隊が、居留民が作った食糧によって保護され、命を承らえている。

真つ赤な太陽が、今、地平線に沈まんとしている。歩みは止まらず「いよいよ老松嶺突破か」古年兵一人、時計を大切に持っていた。午前一時だという。山の上のようだ。明かりが見える。家屋の明かりを見たのは、何十日ぶりだろう。つい里心が出る。犬が遠くで吠えている。近い。前進が止まった。こそこそと伝言令。後に下る。今度は斜めに下っているようだ。小さな川

に出る。渡河だ。幅三メートルぐらいの浅い川だ。目の前にある築堤の上が線路だ。懐かしいこの線路は母につながる線路なのだ。何年も会わないような懐かしさが込み上げてしよがなかつた。無事突破。また山に入ったのだろう。東の空が白くなつた。大休止する。同時に眠る。今日の歩哨は回ってこない。別隊でやっている。夕方また出発。泥棒と同じだ。このような日が何日か続いた。

山中をどう歩いたかは指揮官でなければ分からないが、大海林を越したことは事実だ。小さなレールで敷設した軽便鉄道に出た。大石頭より出発したものではないかと思う。忘れもしない捕虜になつた日が九月十九日だから、逆算すれば九月十七日の日だ。友軍の行軍の跡が、生々しく付近に散見される。東満国境に展開した我が関東軍は、一枚の地図を頼りに南へ西へと下つた。今思つと一兵卒は知らないが、関東軍司令部あたりでは、敦化方面に退き、防戦しようとして、その密旨は上級將校だけが知つていて、敦化を目指して各兵を誘導し、敦化にすれば関東軍も、また満州国も

存在すると考えていたのではなからうか。考えは甘かつた。日本古来の必勝の信念が、日本民族にかつてない試練を与えた。

九月十八日の昼近く、小休止をしていたら前方の彼方に、七、八人の人が旗を持って当方にやってくる。中隊長は双眼鏡を目に「中国兵だ」旗は中国軍の「青天白日旗」であり、「おかしいな」と中隊長も不思議がつて、「本部の方へ行つた。まもなく帰り、どんなことがあつても命令に服するように」と。また急ぎ本部へ各隊長が集まり、それらを迎える。

長い時間が過ぎた。彼らが帰る。中隊長からまた「集まれ」の命令。やはり迫撃兵十一人だ。「みんな休んで聞いてくれ」胸がつまつた声だ。「日本は全面的に降伏した。明日夕刻までに、我々は武器を捨て捕虜となる。長い間苦勞をかけてすまなかつた」半分泣いているのがよく分かる。本来の中隊長であれば、口などきけず、神様のような存在だが、今は親子のような親近感が流れている。「今のところ不明だが、中国かソ連か、どちらかの虜となり、国際法による捕虜とし

て努め、一日も早く日本に帰るよう努力してくれ。念のために日本本土には三十万の在軍が認められているようだ。帰国したら現役の者だけで、追撃部隊を編制する。以上」

中隊長の迫撃を愛する執念。命令なければ負けると予測しても、最善の努力の中から活路を開く精神、実に学ぶところがあつた。

敦化で捕虜となり、敦化より牡丹江第五軍兵舎で、将校大隊を編成、そしてシベリアへ連行される。桑山少尉が明日までの行動を指示する。「ここより三キロぐらい進む。そこで全員宿宮終わり」また歩く。なんとなくこのままお墓に行くようだ。中支方面から転属してきた兵が「捕虜になると、生命と食物は保障される。心配するな」と力説していた。その捕虜扱いが前代未聞の酷使とは知らずに。

昭和二十一年七月、V O七〇号に乗った私は、博多港に着き、やっと日本の土を踏むことができた。

【筆者の横顔】

海老名光夫氏は福島県で生まれ、少年のころ、両親と共に渡満、弥栄村開拓団にて国民学校を卒業された。この弥栄在満国民学校時代に校長四方幸三先生の教えをうけ、満州開拓の原点、「農は国の基なり」を身に付けられたのである。その後、弥栄種畜場に勤務されたが、昭和十九年現役志願、虎林の部隊に入隊される。

昭和二十年八月九日ソ連の侵攻により交戦。終戦として連行されるが収容所から脱走、しかし不運にも逮捕され、今度は運よく釈放され、新京にたどり着き、避難民生活をされる。

二十一年七月祖国の土を踏み、秋には青森県六ヶ所村に弥栄村の同士と共に入植され、開拓に挑戦されたが、郷里福島の両親の健康状態芳しからず、無念にも開拓を断念された。激動の運命を歩んでこられた経営を糧に、福島県会津の里で事業を営んでおられます。

昭和五十四年十一月十七日、岩手県花巻市畠山久耕氏宅に三十四年ぶりに集まった弥栄国民学校同窓生の中に、海老名光夫氏の顔も見えました。引揚げ後、全

国に散った同窓生がその時以来の再開の場であり、この会合は弥栄同窓会発足準備会だったので。この準備会で海老名氏は委員長に選任され、翌五十五年一月二十七日、花巻市花巻温泉で設立総会を開催したので。在満時代の教師五人をお迎えして弥栄同窓会が発足し、会長に海老名氏が就任しました。会の発足の推進役は小林隆興氏、畠山久耕氏が四方先生の御意志を承り、円滑に勤めてくださいました。

昭和六十一年、弥栄同志会と弥栄同窓会との一本化について、弥栄会の総会で要望がありました。同志会は寄る年波で会員が減少し、このまま推移すれば会は消えてしまう状況にあり、同窓会を解散して一本化しようと言う提案でした。これに対し海老名氏は「同志会、同窓会の一本化は時代の流れにしたがって、いずれは合流することは当然。しかし同窓会の発足は、先生と生徒の温かい指定のつながりと親睦を目的に自発的に創った」ものであるから今後も同窓会活動は続ける」と発言され、解散せずに同窓会と合流し、以後「彌栄会」として発展してきております。同窓会長と

しての強い信念の表れと申せましょう。

現在、海老名氏は弥栄会副会長の役にあり、弥栄国民学校同窓生で引揚げ途中で死亡した人や、日本に帰り着いた後、消息不明の人など会員の把握確認の大変な事柄を精力的に努めておられます。弥栄会の今後の発展には海老名氏の盡力は不可欠なのであります。

(彌栄会副会長 小野塚 芳一)

私の歩んだ開拓の道

茨城県 仲野 みよ子

戦後五十年いろいろな思い出とともに時は過ぎ去りました。私は、昭和二年東北の寒村に五人兄妹の末っ子として生まれました。

父は土地の者ではなく、八歳ごろより作男として他人の家で苦勞して働き、学校に行かせるという約束も守ってもらえずに、学校には半年ほど休みながら行っただけで、仕事に追われる毎日だったとか、日ごろ無